

カナダ英語文学史

われらが自然——われらが



クララ・トマス著

渡辺 昇訳

三友社出版

カナダ英語文学史

われらが自然——われらが声

クララ・トマス著 渡辺 昇訳

カナダ英語文学史

1981年 5 月20日初版発行

定価 3,200 円

著 者 クララ・トマス

訳 者 渡 辺 昇

発行者 広 永 正 也

印刷所 福 音 印 刷

発行所 三 友 社 出 版

〒112 東京都文京区音羽1-19-23 成美堂ビル

☎ (03) 946-0285 (代) 振替 東京4-61642

装幀 塩沢美智子

落丁・乱丁はお取り替えいたします。

日本語版への序文

私が本書『われらが自然—われらが声』(*Our Nature—Our Voices*)を世に問うて以後すでに10年経過しましたが、そのあいだにもカナダ文学に関する研究はますますその成熟度を加え、その成果は、これが小学校から高等学校に及ぶあらゆる段階の教育制度のなかにおいてさえ取り上げられるようになった結果として、この国全域に広がるに至りました。1960年代には、カナダ文学研究における画期的な出来事として『カナダ文学史』(*The Literary History of Canada*, 1965)の出版がありました。この堅実な内容をもつ著作は、学者たちよりなる委員会の側からの数年にわたるねばり強い、献身的な精励努力の成果なのですが、これは私たちにとって、わが国過去の文学に関する情報のきわめて貴重な宝庫となっているのみならず、私たちに現在および未来の研究の焦点を提示したものであります。この出版はまた、1967年のカナダ建国百周年記念祝典に向かってすでに形成されつつあった国民的自負心の高揚と、ときを同じくするものでした。そしてこの自負心は、百年かかって到達し得たカナダ国民としての地位を強く意識したものであり、またこの国民的意識の明確な結果として、カナダ文学研究を助成し、わが国の作家たちを奨励しようという、活力と持続性をもった熱意も一般に生じてきたのです。

私と同世代の教師たちは、それまで数十年にわたってカナダ文学研究というか弱い苗木を気を配りながらはぐくんできたのですが、この時期に至って、カナダ文学に関心を抱いた教師たちが、ますます多く私たちの仕事に参加してくれるようになりました。この人たちはしばしば私たちのかつての教え子でもあり、カナダ文学研究の成果を教え、かつそれを確立することに情熱を抱き、

またこれを研究と著述を要する主要な学問分野と見なしていませんでした。かつてはこの分野の理解を深めようとしてもほとんど批評書を得ることができず、研究誌としても『カナダ文学』(*Canadian Literature*)しかなかったのですが、1970年代を通じては、私たちの著作を出版し、それによって雑交受精的な成果を挙げるために、著書や論文がますます多く、着実に収集されるようになり、研究誌の数も急増するに至っています。『カナダ研究ジャーナル』(*The Journal of Canadian Studies*)、『カナダ小説ジャーナル』(*The Journal of Canadian Fiction*)、『カナダ文学研究』(*Studies in Canadian Literature*)、『カナダ文学論集』(*Essays in Canadian Writing*)が、『カナダ文学』と並んで、いまや貴重な批評の公開討論の場としての位置を定着させています。その他、女性の文学研究誌『アトランティス』(*Atlantis*)や『児童文学』(*Children's Literature*)などが、それぞれ専門の研究分野を包括しています。

ノースロップ・フライ(Northrop Frye)はその『カナダ文学史』の「結論」(“Conclusion”)において、多くの学者たちのそれぞれに異なった研究を才気縦横に結合して、問題提起を含みつつも得心のゆくひとつの全体像を作り上げたのですが、その後に出版されたいくつかの批評書は、このフライの考察に関連をもっています。フライは、かつての植民地的地位について、また広大な土地のなかでの孤独についてカナダ人たちが絶えず抱いてきた感情によって形成された、彼らの有するさまざまな知覚のなかから、保守的で自己防衛的な要素を識別し、それを表わすために「^{ちゆうとん}駐屯地心理」(“garrison mentality”)という言葉を作り出しており、これが多くの論文や著書に対して本源的な靈感としての働きをしているのですが、これらの著書のうちでもジョン・モス(John Moss)の『孤独の様式』(*Patterns of Isolation*, 1974)は、19世紀ゴシック小説のわが国における古典的見本であるジョン・リ

チャードスン (John Richardson) の『ワクースタ』(*Wacousta*) から、マーガレット・ロレンス (Margaret Laurence) やマーガレット・アトウッド (Margaret Atwood) といった現代の小説家たちの作品に至る、わが国の小説に関する貴重な研究です。アトウッドは有能で多作な詩人であり、また小説家であって、彼女自身も『生き残り』(*Survival*, 1972) と題する著作でフライの所説を信奉するグループに貢献しているのですが、これはわが国の文学がもつテーマのひとつに関する研究であって、ひどく不完全である反面、非常に面白く書かれた、またきわめて読みやすい著作でもあります。

他の学者たちは、さらに専門的な性格をもった有用な研究書を書いています。トマス・タウスキー (Thomas Tausky) の『セアラ・ジャネット・ダンカン：大英帝国の小説家』(*Sarah Jeanette Duncan: Novelist of Empire*, 1979), エルスベス・キャマラン (Elspeth Cameron) の『ヒュー・マクレナン』(*Hugh MacLennan*, 1981), およびクララ・トマス (Clara Thomas) の『マーガレット・ロレンスのマーナーワーカーの世界』(*The Manawaka World of Margaret Laurence*, 1975) は個々の作家に関する伝記的・批評的研究であり、この種の著作の数はますます増えてきています。マーゴット・ノーシー (Margot Northey) の『亡霊の荒野』(*The Haunted Wilderness*, 1976) はイギリス系、フランス系両者の小説におけるゴシック的要素を探究していますし、ジャック・ウォリック (Jack Warwick) の『長き旅路』(*The Long Journey*, 1969) はフランス系カナダ文学における北部に関するテーマを考察しています。またロレンス・リーコー (Lawrence Ricou) の『垂直な人間／水平な世界』(*Vertical Man/ Horizontal World*, 1973) はカナダ西部小説の研究であり、ディック・ハリスン (Dick Harrison) の『名のなき国』(*The Unnamed Country*, 1977) は19世紀の植民地時代から現

代に至る、西部カナダに関する文学批評と社会史のまぎれもない宝庫の観を呈しています。さらに『われらが自然—われらが声』第2巻の、私の友人でもあり、同僚でもある フランク・デイヴィー (Frank Davey) 氏の手になる『かなたから こなたへ』(*From There to Here*, 1975) には、本書の冒頭近くに掲載した目次からもおわかりのように〔本訳書においては、本文後に掲載〕、活力に満ち、そして有能な現代の詩人や小説家の一群が簡明に紹介されています。

上記のように過去10年間には多くの批評書が出版され、とくにそのうちのいくつかの出現をこのように記録にとどめるのはうれしいことなのですが、本書において考察された作家たちの最近の作品について論じることは、さらにいっそう喜ばしいことだろうと思います。1974年にはマーガレット・ロレンスの『占う者たち』(*Diviners*) が出版されました。これは マーナーワーカーのモラグ・ガン (Morag Gunn) の物語ですが、現在までのところ、ロレンスの文学歴の絶頂を飾る小説ともいえ、また『石造りの天使』(*The Stone Angel*) にはじまる5冊のマーナーワーカー物群を完結させている作品でもあります。ロバートスン・デイヴィス (Robertson Davis) もまた、『驚異の世界』(*World of Wonders*, 1975) および『マンティコア』(*The Manticore*, 1978) によってデトフォード (Deptford) 三部作を完成させています。わが国最古参の尊敬すべき文人たちのうちでも次のふたり、モーリー・キャラハン (Morley Callaghan) とヒュー・マクレナンも長い沈黙を破って小説を発表し、再度私たちを喜ばせております。すなわち、キャラハンは『すばらしき隠遁地』(*A Fine and Private Place*, 1975) および『ふたたび陽に近づきて』(*Close to the Sun Again*, 1977) というふたつの優れた小説を、その真正の作品目録に加えましたし、一方多くの批評家たちは、マクレナンの『時宜にないし声』(*Voices in Time*, 1980) を、彼のもっとも優

れた小説と見なしています。これはたしかにマクレナンの長くて変化に富んだ文学歴の、きわだった極点を示す作品といえるでしょう。アーヴィング・レイトン (Irving Layton) は 1970 年代のわが国の詩人たちのうちでいちばん多作でしたが、その 16 冊の出版物のなかで『アーヴィング・レイトン詩集』(*The Poems of Irving Layton*, 1977) が、彼の長い作家生活においてもっとも完全で、代表的な詩集となっています。レナッド・コーイン (Leonard Cohen) はその小説『美しき敗北者たち』(*Beautiful Losers*) およびその詩や歌によって、1960 年代の若者たちに人気のある文化的英雄でしたが、現在ではどちらかといえば引退した形で、1970 年代には『奴隷たちの力』(*The Energy of Slaves*, 1972) という詩集を一冊出版しただけでした。詩人兼劇作家であるジェイムズ・リーニー (James Reaney) は、長いあいだ献身的に演劇関係の雑多な仕事にたずさわってのち、ドンリー家 (the Donnelly's) の運命を取り扱った三部作をたずさえて、すでにわが国第一線の劇作家として復帰しています。このドンリー家というのは、19 世紀後期にオンタリオ州で虐殺されたアイルランド人の家族であって、同じ開拓者である隣人たちの側の、恐怖と無知と宗教的頑迷^{がんめい}さの犠牲となった人たちです。

1980 年代が進展するにつれて、わが国の作家たちの作品、および学者たちの著作も、その活力を継続・発展させてゆくだろうと、私は信じています——それも出版費用の漸増や、それに伴うさまざまな困難にもかかわらず、です。私たちはすでにカナダ文学と、その文学研究の堅固な基礎を築いています。基礎が築かれ、そしてはずみが加わったいま、私は次の発展の段階として、歴史的・社会的・批評的見地から見た地域研究に、漸次目が向けられてくるだろうと信じています。フランス系文学研究はすでにイギリス系カナダ人の強い関心を引いています。ニューファンドランド、大西洋諸州、オンタリオ州、大平原諸州、およびブリティッ

シュ・コロンビア州の文学も、それぞれの歴史的特異性と、その場所と住民に対する作家たちの想像的知覚力と表現力のゆえに、ひとしく研究に値するものなのです。

おそらく現在カナダ人にとって、わが国の文学に他の国々の読者や学者諸氏が関心を示して下さるほど、有難いことはないでしょう。その関心は、ついに植民地的抑圧や束縛から解放された、自治権をもった国家としてのカナダやその作家たちに、榮譽をもたらしてくれるものなのだからです。今回私の著書『われらが自然—われらが声』を渡辺教授が翻訳され、率先してこのような日本語版として出版される運びとなり、光栄と思うと同時に、心より感謝しています。そして本書が日本の読者諸氏にとって、カナダ文学、および太平洋を隔てた、遠いけれども友好的な隣国であるカナダそのものに対する、有用な手引書となるよう希望しています。

ヨーク大学教授 クララ・トマス

トロントにて

1981年2月

著者序文

本書『われらが自然—われらが声』(*Our Nature—Our Voices*)は、カナダ英語文学の歴史とその形成に参画したいくばくかの人びとの生涯を知るための簡明な手引書である。この国では、ここに取り上げた人たちのほかにも多くの文人たちが活躍してきた。筆者はわが国の過去および現在について研究する人たちが、自らの手でカナダ文学発展の記録を編み、自らの手でそのゆくべき針路を指し示してほしいと思っている。終局的な要約とか四角ばった結論とかいった、いわゆる終着点ではなく、珍しいものや楽しみを求めていずこへか旅立ってゆくための出発点——これが本書の目的とするところである。

本書はまた筆者が現在教えている学生やかつての教え子たち——カナダ文学に対し強い関心を示しはじめている学生たちを教え、彼らの問いに熱意をこめて答えようとしている卒業生たち——によって、最近とみに多く投げかけられてくる質問に答えるために書かれたものである。近年ロジャー・ドゥーアーメル (Roger Duhamel) [1916-。モントリオール大学フランス文学教授] 著『カナダ仏語文学の手引き』(*Manuel de la Littérature Canadienne-Française*) [1967] が時代の要請にこたえて出版されたが、本書もまたこれと同じ意図のもとに執筆されたものである。筆者は学内・学外の読者に本書をひもとくことによって、さらに高い研究意欲と、さらに強い読書欲をかき立ててほしいと願っている。とくに筆者は教師や学生たちに、本書を通して可能なかぎりの学際的研究分野、とりわけカナダの文学・歴史・社会学の分野に目を向けるきっかけをつかんでほしいものと思っている。

カナダ文学を全体にわたって考えるとき、われわれが主要作品と見なしている小説や詩のほかにも、多くの分野の作品が含まれてくることがわかる。何十人もジャーナリスト、聖職者、議会人、日記作者、批評家たちも、カナダ文学の基盤となる多数の作品を世に問うている。彼らの語る言葉に接することによって、人びとはカナダの国土において得られた体験を心に受け止め、想像のうちに描くことができるのである。彼らの多くは言語の技法にもたけ、その洞察力と批評眼を駆使することによって、作品のなかにカナダにおいて自らが経てきた体験、また現在経つつある体験を、絶えず生き生きと伝えてくれる。

われわれはこの国の歴史がはじまって以来、文学的技法をも自由に駆使してきた。それはときとして旅行記作者の巧みな表現、議会人の感情のこもった演説のなかに見いだされる。しかしそれがもっとも多く存在し、また高度な力を発揮しているのは、詩人や小説家たちの作品、その一行、一連、一節、ときとして登場人物や詩全体がもつ現実感においてである。作家たちはこれらの作品を、無秩序に拡散し、混沌とした状態にある周囲の生活の瑣事さじのなかから、巧みに選び出された事柄を用いて書き上げている。彼らは詩や散文のうちに真実のイメージを形成し、また確固とした筋書を構成し、そのうえで芸術作品の特性である時機に即応するのに必要な独自性と、時機を問わず即応できる耐久性とを獲得するのである。われわれはこれらの作品の描く情景を心に再現することができる。わが国の文学のなかにそれを探し求め、遭遇したときにそれと認識するだけの労をとりさえすれば、われわれはその作品を繰り返す、思う存分に享受することができるのである。

『われらが自然—われらが声』第1巻は3章より成っている。第1章は1867年までの「開拓時代」、第2章は1918年までの「カナダと大英帝国の時代」、そして第3章は「現代」である。各章には作家たちについての論評が、その生まれた年代順に配列されて

いる。もっともこの第1巻にわが国の作家が完全に網羅^{もうら}されているというのではない。本書に収録する作家を選ぶに当たっては、読書や研究に役立つ作品を配慮したほか、学生、とくに高等学校の年代の人たちに訴えかけ得る可能性を念頭においた。なお当然第1巻に収録されるべきだと思われる作家たちのうちの幾人かが割愛されているのは、フランク・デイヴィー (Frank Davey) [1940—。カナダ詩人] 氏と筆者が、その作家たちを第2巻に含めるということで合意したためである。発行計画のなされている第2巻¹⁾の目次は、この「序文」のあとに掲載する²⁾。

本書に掲げる関係書目を選ぶに当たっては、慎重を期したつもりである。読者諸氏にはここに挙げた作家たちの主要作品、およびこの人たちやその生きた時代を解明している参考文献も、いくつかは読んでいただきたいと思う。またとくにペーパーバック版で入手できる作品をこのなかに含めるよう努力した。幸運なことに、現在カナダでは再版計画が急速度で推進されている。本書が出版される頃までには、他に多くのカナダの再版本が入手可能となっていることであろう。これらの出版物に対しては、筆者は読者諸氏に十分な注目を促すにとどめたい。

同僚のフランク・デイヴィー氏には本書の第2巻の企画に情熱的に取り組んでいただき、感謝している。本書構成上の調査や関係書目作成に当たっては、ヨーク大学の学生・同僚の諸氏、とくにメアリ・ピゴット (Mary Pigott), ローレル・トムスン (Laurel Thomson), ビル・ボイル (Bill Boyle), レズリー・モンクマン (Leslie Monkman) の協力にあずかるところが大きかった。また本書に写真を掲載する許可を与えて下さったカナダ文書局の御協力にも感謝する。最後に優れたタイプの援助をいただいたマーヤー・モーインズ (Marja Moens) 夫人に深甚^{しんじん}の感謝の意を表する。

クララ・トマス

ヨーク大学にて (1972年10月)

目 次

日本語版への序文	iii
著者序文	ix

第 1 章 開拓時代

—1867年まで—

第 1 章概説	2
フランシス・ブルック (Frances Brooke)	6
ウィリアム・‘タイガー’・ダンロップ (William ‘Tiger’ Dunlop)	7
アンナ・マーフィー・ジェイムスン (Anna Murphy Jameson)	11
ウィリアム・ライアン・マッケンジー (William Lyon Mackenzie)	16
トマス・チャンドラー・ハリバートン (Thomas Chandler Haliburton)	19
ジョン・リチャードスン少佐 (Major John Richardson)	26
エジャトン・ライアスン (Egerton Ryerson)	33
ストリックランド一族 (The Strickland Family) ...	37

スザナ・ムーディー (Susanna Moodie)	
サミュエル・ストリックランド (Samuel Strickland)	
キャサリン・パー・トレイル (Catharine Parr Traill)	
ジョージフ・ハウ (Joseph Howe)	45
トマス・ダーシー・マギー (Thomas D'Arcy McGee)	47
第1章の注	50

第2章 カナダと大英帝国の時代

—カナダ連邦から第一次世界大戦まで—

第2章概説	58
ゴールドウィン・スミス (Goldwin Smith)	62
チャールズ・メア (Charles Mair)	64
イザベラ・ヴァランシー・クロフフォード (Isabella Valancy Crawford)	66
チャールズ・ジョージ・ダグラス・ロバーツ (Charles George Douglas Roberts)	72
アーネスト・トムソン・シートン (Ernest Thompson Seton)	78
ラルフ・コナー (Ralph Connor)	81

アーチボールド・ランプマン (Archibald Lampman)	87
ブリス・カーマン (Bliss Carman)	92
E. ポーリー・ジョンソン (E. Pauline Johnson)	97
ダンカン・キャンベル・スコット (Duncan Campbell Scott)	98
セアラ・ジャネット・ダンカン (Sara Jeannette Duncan)	103
ステイヴン・リーコック (Stephen Leacock)...	110
ロバート・サーヴィス (Robert Service)	116
ルーシー・モード・モンゴメリー (Lucy Maude Montgomery)	119
第2章の注.....	123

第3章 現代

—1918年から1970年まで—

第3章概説	130
エミリー・カー (Emily Carr)	143
フレデリック・フィリップ・グローヴ (Frederick Philip Grove)	146
エドウィン・ジョン・プラット	

(Edwin John Pratt)	153
メイゾー・ダ・ラ・ローシュ (Mazo de la Roche)	162
エセル・ウィルソン (Ethel Wilson)	167
F. R. スコット (F. R. Scott)	169
マーサ・オステンソー (Martha Ostenso)	173
A. J. M. スミス (A. J. M. Smith)	177
モーリー・キャラハン (Morley Callaghan)	182
アール・バーニー (Earle Birney)	189
ヒュー・マクレナン (Hugh MacLennan)	193
アーネスト・バックラー (Ernest Buckler)	199
シンクレア・ロス (Sinclair Ross)	203
エイブラハム・クライン (Abraham Klein)	208
アーヴィング・レイトン (Irving Layton)	212
ロバートソン・デイヴィス (Robertson Davies)	215
W. O. ミッチェル (W. O. Mitchell)	220
ミリアム・ウォディントン (Miriam Waddington)	222
アル・パーディー (Al Purdy)	226
シーラ・ウォトソン (Sheila Watson)	239

ジェイムズ・リーニー (James Reaney)	241
マーガレット・ロレンス (Margaret Laurence)...	250
モーディカイ・リッチラー (Mordecai Richler)...	258
レナッド・コーイン (Leonard Cohen)	264
第3章の注	270
訳者あとがき	277
主要参考文献	281
第2巻目次	283
作品および文献目録	284
一般参考文献	325
索引	329